



詩人のマーサ・ナカムラさんとゲストとの歓談を通して、詩の味わいや、味わい方の多様さを探る連載「詩味礼讃 好詩家たちの対話」。第五回は、手話をベースにした詩の空間表現「サインポエム」を通してさまざまな活動を続ける Sasa/Marie (ササ・マリー)さんをお迎えし、マリーさんが大好きだという東京・上野桜木の平櫛田中邸(67ページ参照)で収録を行いました。

空間表現でも詩は伝わる

マーサ 私がマリーさんの活動を知ったきっかけは、実家に帰省していたときにたまたま見ていたNHKの番組でした。畳の部屋に集った人たちがダンスのように体を動かして詩を表現する様子が紹介されていて、そのとき初めてサインポエムという言葉を知ったんですが、能動的に体を使った詩の表現方法というと、それまでは朗読か歌くらいしか知らなかったもので、こういう世界もあるんだとびっくりしたんです。そこから、

マリーさんの活動についていろいろと調べたりしたんですが、三歳から詩を書き始めたんだそうですね。

マリー 当時の詩がいまでも残っていて、親が言うには三歳くらいのときに書いたものなんだそうです。文字として判読できない部分も多いんですが、一応ストリーがあるように読めるんです。

マーサ 当時から、詩を読まれてもいたんですか？

マリー 読んでいたというか、小さいころのほうがいいまより聴力があつたので、親が読み聞かせをしていたんだと思います。

マーサ 詩が面白いと知ったのは、私の場合は大学生になってからなんです。

マリー 私が「あ、これが詩というものなんだ」と意識して好きになり始めたのは、小学校高学年くらい。そのころは(北原 白秋や、明治大正の文豪の詩が好きで、お気に入りの詩はノートにじゃんじゃん書き写していました。子ども時代は父に連れられて、よく神保町の古本屋さんに通っていたんですが、そこで手に入れた上田敏訳のボードレールの詩集が、初めて自分で買った詩集です。中学生くらいだったかな。

マーサ すごい！ そのときは、まだサインポエムは

していなかった？

マリー そもそも自分が聞こえない人なんだと理解したのが、大学に入ってからなんです。それまでは、ずっと聞こえる世界で生きていたので、手話を知ったのも大学に入ってからでした。

マーサ 私は中学から大学まで能を続けていたんですが、謡は好きでも舞は苦手で、言葉によって体が動き出すという経験を、いまままでにしたことがないんですね。初めてサインで表現した詩は、魔王が出てくる外国の詩(ボードレール『悪の華』の序詩「読者へ」)だったとネットで拝見しましたが、詩を表現しようと体が動き出す瞬間って、どういう感じなんですか？

マリー それ以前から手話を使って詩を表現しようと思ったことはあったんですが、「これはいける」と思っていたのが「読者へ」のときで、手話を始めて十年くらい経ったころでした。

マーサ 「いける」というのは、どんな感覚だったんでしょうか。

マリー そのときは同じ詩を声で朗読する人もいて、私は手話の担当だったんですが、そのスピードが朗読とまったく合わなかった。そこで、途中で合わせるの

ささ・まりー●Sign Poet/手話の詩人。サインや日本語を用いて「はざま」の表現を追求している。「でんちゅう組」この指とまれ担当。仲間とともに、みて感じてきて楽しむ「詩の空間」を展開。

まーさ・なかむら●1990年埼玉県生まれ。第54回現代詩手帖賞、『狸の匣』(思潮社)で第23回中原中也賞、『雨をよぶ灯台』(思潮社)で第28回萩原朔太郎賞を受賞。